

2. 「スイミー」

ひろ うみ のどこかに ちい さかな きょうだい たの く
広い海のどこかに小さな魚の兄弟たちが楽しく暮らしてた。

あか いっぴき がい ま くろ
みんな赤いのに、一匹だけはカラス貝よりも真っ黒。

およ だれ はや
でも泳ぐのは誰よりも速かった。

なまえ
名前はスイミー。

ひ おそ はや
ところがある日、恐ろしいマグロがおなかすかせて、すごい速さで、ミサイルみた
いに突っ込んで来た。

ひとくち ちい あか さかな いっぴきのこ の こ
一口でマグロは小さな赤い魚たちを、一匹残らず飲み込んだ。

に
逃げたのはスイミーだけ。

およ
スイミーは泳いだ。

くら うみ そこ
暗い海の底を。

こわ
怖かった。

さび
寂しかった。

かな
とても悲しかった。

うみ
けれど海には、すばらしいものがいっぱいあった。

み げんき と もど
おもしろいものを見るたびに、スイミーはだんだん元気を取り戻した。

にじいろ
虹色のゼリーのようなクラゲ。

すいちゅう いせえび
水中ブルドーザーみたいな伊勢海老。

み さかな
見たことのない魚たち。

見えない糸で引っ張られてる。ドロップみたいな岩から生えてる、コンブやワカメの林。

ウナギ。顔を見るところには、しっぽを忘れてるほど長い。

そして、風にゆれる桃色のヤシの木みたいなイソギンチャク。

そのとき、岩かげに、スイミーは見つけた。

スイミーのとそっくりの、小さな魚の兄弟たち。

「出て来いよ、みんなで遊ぼう。おもしろいものがいっぱいだよ！」

「だめだよ。」小さな赤い魚たちは答えた。

「大きな魚に食べられてしまうよ。」

「だけど、いつまでもそこにじっとして居るわけにはいかないよ。」

「何とか考えなくちゃ。」

スイミーは考えた。いろいろ考えた。うんと考えた。

それから突然スイミーは叫んだ。「そうだ！」

「みんな一緒に泳ぐんだ。海で一番大きな魚のふりして！」

スイミーは教えた。決して離れ離れにならないこと。

みんな持ち場を守ること。

みんなが一匹の大きな魚みたいに泳げるようになったとき、スイミーは言った。

「ぼくが目になろう。」

あさ つめ みず なか ひる かがや ひかり なか およ おお さかな お だ
朝の冷たい水の中を、昼の輝く光の中を、みんなは泳ぎ、大きな魚を追い出した。